

TOPICS
3

トピックス…③

畜産統計から見た
生乳生産構造の変化

農林水産省は7月1日、平成24年2月1日現在の乳用牛の飼養戸数と飼養頭数（畜産統計）を公表した。乳用牛の飼養戸数は20,100戸で、前年に比べて900戸（4.3%）減少し、飼養頭数は1,449千頭で同18千頭（1.2%）減少した。その結果、1戸当たりの乳用牛飼養頭数は72.1頭で、前年に比べて2.2頭増加した。

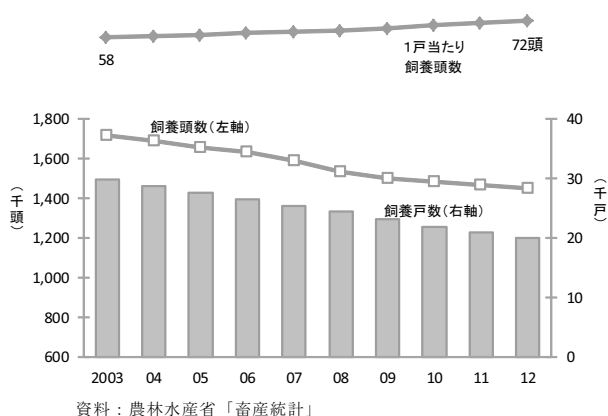
飼養戸数と飼養頭数の減少傾向

戦後の有畜農業振興施策のもとで増加傾向にあった乳用牛の飼養戸数は、昭和38（1963）年の417,600戸をピークとして減少に転じ、昭和57（1982）年に10万戸の大台を割り、その後も減少を続けて平成24（2012）年に20,100戸となった。

一方、乳用牛の飼養頭数は、昭和60（1985）年に2,111千頭に達するまで順調な増加を示したが、その年を境に減少に転じ、平成7（1995）年に2,000千頭、平成22（2010）年に1,500千頭を割り、平成24（2012）年には1,449千頭となった。

図1には、平成15年（2003）年から平成24（2012）年の乳用牛の飼養戸数と飼養頭数の推移を示した。この10年間も減少に歯止めがきかず、飼養戸数は9,700戸（33%）、飼養頭数は270千頭（16%）減少した。しかし、飼養戸数の減少率が飼養頭数のそれを上回った結果、1戸当たりの飼養頭数の平均は58頭から72頭に14頭（24%）増加した。これを地域別に見ると、北海道が113頭、都府県が49頭で、両地域の差は約2.3倍まで拡大している。

図1 乳用牛の飼養頭数・戸数の推移



成畜100頭以上飼養経営の台頭

すでに述べたように、平成24（2012）年の乳用牛の

飼養戸数は20,100戸、飼養頭数は1,449千頭であるが、そのうち生乳を生産していると想定される成畜飼養戸数は19,900戸、成畜飼養頭数は1,005千頭となっている。これを地域別に見ると北海道が6,969戸で531千頭、都府県が12,457戸で474千頭となっている。この結果、1戸当たりの乳用牛成畜飼養頭数の平均は北海道が76頭、都府県が38頭で、両地域の差は2倍となっている。

乳用牛の成畜飼養頭数は生乳生産量に大きな影響を及ぼすが、その飼養規模別の飼養戸数と飼養頭数は、わが国の生乳生産構造を規定する主要な要素の一つと言える。北海道と都府県の1戸当たりの乳用牛成畜飼養頭数には大きな差があるため、地域別に生乳生産構造の特徴を検討する。

北海道で、飼養戸数と飼養頭数ともに、全体に占める割合が継続して上昇しているのは、100頭以上の階層だけである。このような状況の中で、全体に占める割合が小さいとはいえ、20頭台の飼養戸数の占める割合がわずかに上昇していることが注目される。他方、都府県の状況を見ると、80～99頭と100頭以上の階層が、飼養戸数と飼養頭数ともに全体に占める割合が継続して上昇している。しかし、成畜50頭未満を飼養する経営が全体に占める割合は、飼養戸数、飼養頭数ともに、北海道よりも都府県の方が高い。

このように、両地域ともに成畜を100頭以上飼養している経営の飼養戸数と飼養頭数が、全体に占める割合を上昇させている。その結果、北海道では20%強の経営が半分近くの成畜を飼養し、都府県ではわずか5%の経営が4分の1近くの成畜を飼養している。以上のことから、成畜を100頭以上飼養している経営の動向が、わが国全体の生乳生産量に大きな影響を及ぼす時代になったと言える。また、この階層の飼養戸数と飼養頭数の関係を比較すると、少数の大規模経営への生乳生産の集中度は、北海道よりも都府県の方が高いと推察される。